

ヒツジの名称体系

——イラク共和国ハムリン盆地の定住農牧民の場合——

篠 原 徹

はじめに

1. ヒツジの放牧
2. ヒツジの名称体系

3. 個体識別とヒツジ・サル・ウシ

おわりに

論文要旨

人と関わる動物が群れをなしている場合、人はその個体差をどう弁別して分類し命名しているのだろうか。この問題をイラク・ハムリン盆地の定住農牧民の牧童、日本の霊長類研究者および徳之島の闘牛を楽しむ人々を例にとり、分類と命名の論理の特徴を抽出した。対象となる動物は家畜としてのヒツジ、野生のニホンザル、闘牛用のウシの3種である。ヒツジを分類する論理は植物の検索表に使われる二分法の原理と類似しており、それは形態差に基づくものである。類別され名称を与えられたヒツジは単独な個体を指示するのではなく、ある条件を満たす個体の集合で代替可能な存在である。それに対してニホンザル・ウシの命名は個体識別に基づいた個体の個性を認めた分類であり、代替不可能な単独な個体を指示する。

命名に関する民俗的分類思考にリンネ式二名法に類似するものと個体識別法に類似するものの存在が考えられる。ヒツジの体色のパターンと耳の長さによる民俗的なリンネ式二名法ではヒツジの性格や行動の特徴は捨象される。けれども日本では民俗的なリンネ式二名法はみられず、動物にパーソナリティを認める個体識別法は霊長類研究者に固有のものではなく民俗のレベルにも存在することを示唆した。この同一種の個体差に関する認識の差異が彼我の動物観の差異となって反映しているのではないか。

はじめに

イラク共和国の首都バグダッドの北東約130kmのところ北西から南東にかけて低い山地が走っている。これをハムリン山地という。この山地を境界にイラクはその南側にセミ・デザートの平坦部分と北側の山間部に分けることができる。イランのザクロス山脈から流れ出たティグリス川の支流ディヤラ川は山間部から平坦部に抜けるあたりで標高100m前後になる。このディヤラ川は平坦部にでるところでディヤラ川の別の支流ナリン川と合流している。

ナリン川とディヤラ川に挟まれた広大な地域をハムリン盆地というが、この合流点をせき止めてダムを造ることがイラク政府によって計画された。ここに灌漑用の水を確保して、ここより下流の地域を灌漑し農業生産力を高める計画である。ダムが造られたのが1980年であった。しかしこの地域はメソポタミア文化の形成と発展にとって重要な意味をもっていた。イラン地方とメソポタミア中部を結ぶ要衝の地であり、同時に南北メソポタミアの通路でもあった。そこには数多くのテル（遺丘）が存在していた。当時のイラク考古庁の要請によって国際協力によるテルの発掘がダム建設に先だつ数年間精力的に展開された。

日本からは国士舘大学イラク古代文化研究所が中心になって文部省科学研究費の海外学術調査費（課題：イラク・カルバラ砂漠遺跡調査及びイラク・ハムリン山地テル・アル・グッパ発掘調査，研究代表：藤井秀夫）を得て参加していた。筆者も1978年12月から1979年5月まで研究分担者としてこの調査に参加した。調査はテル・グッパとテル・ソンゴル中心に行なわれたが、テル・グッパの南にテル・ハメディヤートとよばれる丘がありササン朝ペルシャ期の遺跡の存在が予想された。筆者は主としてこのハメディヤートの小規模な試掘を担当した。これらの海外調査の成果はすでにイラク古代文化研究所の発行する『ラーフィダーン』誌上⁽¹⁾に報告されている。

今回ここで述べるのはその時得られた発掘以外の資料であり、この調査の中心的テーマではない。発掘現場近くにヌーレ・アミン村とパラダン・パウイ村があり、すでに多くの住民は離村していた。残っていた人々は発掘の手伝いに参加していた。残って発掘に参加した人々とのつきあいから得た資料のなかで、とくに彼らの重要な生業の1つであった牧畜活動に関連する興味ある問題を報告してみたい。すでに15年の歳月が流れ、この問題に関連する業績も多くだされている⁽²⁾。新鮮さはないが現在の筆者の抱えている問題意識と若干交錯させて再考してみたい。ただし筆者が調査した時点で2つの村そのものが消滅寸前であり、通常この手の調査に必要な村落の概況や社会構造の記載に必要な資料はないことをあらかじめお断わりしなければならない。

さてバグダッドの北東に100km行くと標高200m前後の小さなハムリン山地があり、それを越えると標高約100mの広大なハムリン盆地が広がる。山地の景観が変わるだけで盆地内はバグダッド近郊のセミ・デザートの景観とそれほど変わらない。方名ショックやアグルと呼ばれる刺の多い草本が一面に生える褐色の世界である。ディヤラ川は盆地内でさらに分かれナリン川とデ

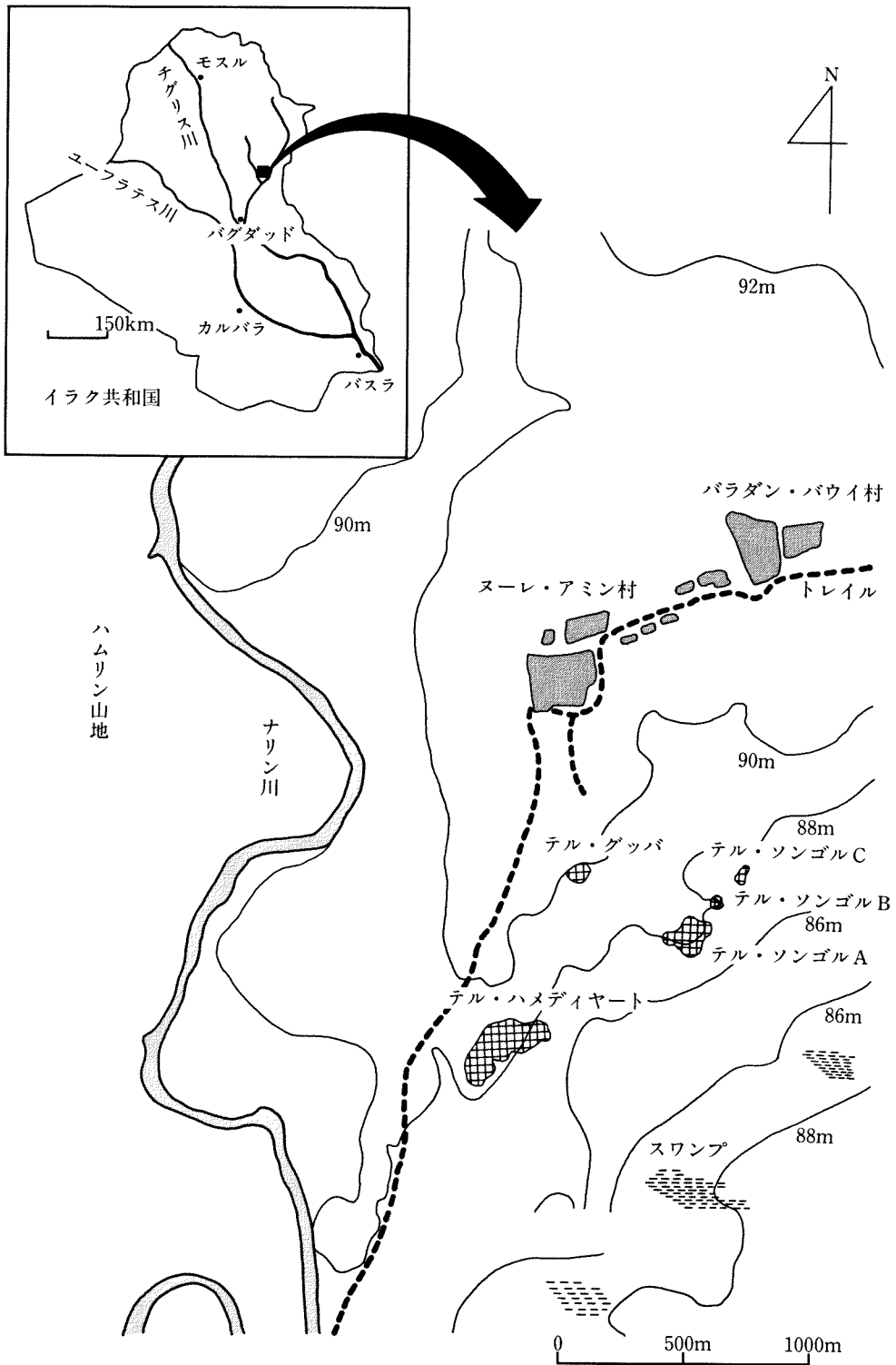


図1 ヌーレ・アミン村とその周辺
『ラーフィダーン』Ⅱ巻, 1981(註1)より。若干修正を加えている。

ィヤラ川に分岐する。ナリン川はハムリン山地に沿って流れる小さな河川である。盆地内でもっとも大きな町はジャラウラであり、ここは古くはハナキンと同様にペルシャとメソポタミアの交通の要衝地であった。このジャラウラから南西に 20km ほど主要幹線道路からはずれてバグダード方向に戻ったところいくつかの村がある。2つの川の合流点近くにヌーレ・アミン村とバラダン・バウイ村が約 500m 離れてある。ここに辿りつくまでの間にもバヒーゼ、モハムラなどかなり大きな集落がナツメヤシの樹林に囲まれて褐色の半砂漠にくっきりと光と影の陰影のある世界をつくっている。

イラクはアラブ世界のなかでは豊かな農業国である。コムギ・オオムギ・トウモロコシ・ゴマ・エンドウなどが栽培され、ナツメヤシ・ザクロ・イチジク・ブドウなど果樹も豊富である。なかでもナツメヤシはその実をタモル⁽³⁾といい、これを乾燥して大量に保存する。農耕の様式もハムリン山地を境に南側は灌漑による農耕、北側の山間部は年間降雨量は 300mm 以上になりドライ・ファーマーミングが可能となる地域である。したがってハムリン盆地内の丘陵地では天水農業を、低地ではナリン川の灌漑による農業が行なわれている。ちょうど農耕形態がこの山地を境に異なるように北側にはクルド族が多くなり、南側にはアラブ系住民が多くなる。ディヤラ川とナリン川の合流地点近くのヌーレ・アミン村とバラダン・バウイ村はアラブ系住民が多数を占める村である。

発掘の調査団が根拠地にしたのはヌーレ・アミン村の一角であり、当時家数はすでに 9 軒しかなかったと記憶している。アドベと呼ばれる日干しレンガで家を造る典型的なアラブ的景観の村である。農耕と牧畜を中心にした定住的な集落で、フンタ（コムギ）・シャイル（オオムギ）を12月に播き、翌年の5月に収穫する。そして家畜としてヒツジ・ヤギを飼育する農牧の混交した生業形態をとる村であった。ヤギ・ヒツジは混群で飼育され、朝早く牧童がつれて放牧する。そして夕方には家に戻ってくる。発掘にも参加していたアスワードの家族もそうした生活様式をとっていた。

問題の発端はこのアスワードの家の家畜から始まった。アスワードの家の前に小さな灌漑用のディッチが流れていてそこに家に入る小さな土橋がかかっている。家屋はアドベでできた塀で囲まれていて、入り方はこの橋を渡って入るしかない。アスワードのヤギ・ヒツジの所有数を知るには夕方この橋を通り抜ける頭数を数えればいい。こうして何回かそれを試みた。それを確認するためにアスワードとその家族に頭数を聞いてみた。ところがヤギ・ヒツジのそれぞれの頭数が家族員によって、また聞く日によって異なるのだ。総数 150 頭を前後にして数頭異なる数字が答えとして返ってくる。しかし、彼らがヤギ・ヒツジを放牧させているとき、途中である個体が行方不明になったりすると大騒ぎをしてそれを探索する。どの個体が群れを見失ったのか牧童はよく認知しているらしい。

また次のようなこともあった。ヒツジ・ヤギの飼育では1日1回母子対面という凄まじい光景がみられる。それは子ヒツジ群と親ヒツジ群は別々に1日中放牧されて夕日の落ちるころ牧童に

誘導されて帰ってくる。そして砂漠の薄暮のなかで搾乳がはじまる。それが終わると隔離されていた子ヒツジ群が母親のヒツジの群れに解き放たれる。子ヒツジと母ヒツジの鳴き声が交錯しお互いに捜しあい、まわりは砂埃がたち喧騒の一瞬である。ほとんどの子ヒツジが前足を折って乳房に吸いつく。そのなかに2、3頭の母親のない子ヒツジと、逆に吸いつく子ヒツジのいない母ヒツジがウロウロしている。ドーナムと称される泥レンガの家屋内でときには100頭ちかくの母子ヒツジがひしめきあう。自分の子供でない場合は母ヒツジはいやがって子ヒツジを蹴飛ばす。乳の飲めない母のない子ヒツジは人間が介入し強引に子のない母ヒツジに押しつけて乳を飲ませる。このとき牧童はどの子ヒツジが母をなくし、どの母ヒツジが子をなくしたのかよく認知している。死んだヒツジがどこで、いつ死にどんな模様のヒツジであったのか語ってくれる。だから1頭1頭の個体についての明確な認識は存在している。にもかかわらずなぜ群れの個体数は日により人により異なるのか。混群の個体数を知らないとすれば、すべての個体に個体名をつけて認識しているのか。たとえそうであっても150頭近くもの個体名があったとしてもある個体がないことが即座に理解できるのはどうしてか。実はこれがヤギ・ヒツジの名称体系と深い関係があったのだが、この筆者にとって不可解な現象の奥に潜むものを摘出してみたいと思った。

1. ヒツジの放牧

半農半牧の定住的なヌーレ・アミン村の人々が所有するヤギ・ヒツジをどのように数えているかという問題は、畢竟彼らがヤギ・ヒツジをどのように認識しているかという問題に帰結する。所有数はさておき、まず彼らが家畜にどのような名称を与え識別しているだろうか。そのためまずヤギ・ヒツジに関する人々の民俗知識を収集しなければならない。そこでできる限り特定の群れについての情報を集め、それをその村の誰もが共有している知識であることを他の群れで確認していく方法を採用した。

ヌーレ・アミン村9軒の家はどの家もおよそヒツジ150頭～200頭、ヤギ40頭～50頭を保有している。そのなかで羊飼に熱心なアスワード家を対象にすることを決めた。この家族の構成はアスワードとその妻、アスワードの姉、アスワードの両親、アスワードの子供たち(女4人、男1人)からなっている。アスワードは歳のころ40歳前後、アスワードはアラビア語で黒いという意味だが、その名のとおおり黒い。牧童の仕事はたいてい子供や若い人がおこない、大人の男たちはしない。アスワード家の場合には牧童として自分の娘以外に隣村バラダン・バウイ村に両親の住むアスワードの甥ヤーシン(12歳)を雇っている。

放牧は午前と午後で牧童が異なり、ヤーシンが午前を受けもつと午後はアスワードの長女フォージア(11歳)と次女サーディヤ(9歳)が分担する。マドラサといわれる学校は土曜日から木曜日まであり、男子と女子の生徒を午前と午後に振り分け授業をしていた。ヤーシンは午前中放牧し、昼ごろ家の近くに帰ってきて、フォージアとサーディヤに群れを引き継ぐ。ときどき一家

の主人であるアスワードは夕方群れが帰るころ迎えにいったりすることはあるが、原則的には既婚の婦人や年寄りまた成人の男は放牧には従事しない。つまりこれは未婚の子女の仕事である。

1979年1月14日の日の出は7時15分であった。薄暗いうちにヤーシンはアスワードの家にいきドーナム(日干しレンガの塀で囲まれた建物群、敷地をさす)の入り口の重い扉を開けてヒツジ・ヤギの混群の放牧にでた。集落の周辺は耕地が多いのでこれを避け、水路沿に群れを誘導する。ヤギはリーフ・イーターの傾向をもつので概して灌木の生えているところを好み、群れは拡散しがちである。ヒツジはグラス・イーターであるので草地を好む。ヤギに比べ臆病なのか集合した状態をつくりやすい。牧童はヤギの分散とヒツジの集合の両者を統合しながら目的地へ誘導していく。放牧のコースはシマーネと呼ばれる湿地やナリン川沿いに集落から半径5～10kmの円を描いて歩く。

群れは口笛と棒を巧みに使って統御される。口笛はソファーレ、棒はトゥースというがその使い方には一定の作法がある。アスワードの群れはヒツジ153頭、ヤギ35頭であった。これには授乳を必要とし群れから隔離されている子ヒツジと子ヤギは含んでいない。ヤーシンが放牧にでるときはこの混群188頭を一人で誘導するが、フォージアとサーディヤが放牧にでるときはズマイルつまりロバに乗ってでかける。また夏の酷暑の季節にはハムリン山地に放牧にでると言うが、この場合はいつも犬を伴うようだ。娘が放牧にでるときもよく犬を伴う。ほとんどの家では番犬として犬を数匹飼っている。番犬は大きく狂暴で吠えるだけでなく、見知らぬ者が家に入ると敢然と噛みついてくる。村のなかを歩くときは、村人であっても石ころを2つ3つ懐にいれて歩く必要があるくらいである。実際野生のオオカミが群れを襲うこともある。

集落周辺の植生を概観してみると、次の4つのタイプに分類できる。ハムリン山地は前述したように夏の放牧地として使われている。植生も低地と異なっていて灌木はほとんどない山で、背丈の低い刺植物が多い。ここでは天水による農耕もない。特徴的なことはヤギ・ヒツジの放牧をするため山がだんだん畑のようになっていることである。ハムリン山地の植生が過放牧によるものかどうか興味深い。ハムリン盆地内ではまずナリン川に沿った植生をあげなければならない。ここは河辺林は発達しておらず、せいぜい高さ2～3mの灌木やヨシの仲間が密生している。野生イノシシも多く、河辺林で遭遇することもしばしばあった。盆地内はところどころに湿地帯があり、こういうところはシマーネと呼ばれている。方名でハリファというカレックス属の植物が多い。塩分が非常に多く乾燥するとサブハという白い石膏の塊が浮きでる。残りが休耕地と集落から離れた半砂漠地帯である。

1月下旬ころの半砂漠は一面褐色でなにもないようにみえるが茶色になったショックとかアグルという刺植物が多い。この時期にはヤギ・ヒツジは根を掘り起こしてこれらを食べる。植物採集をするとおよそ100種の植物を確認できたが、標本の同定はできなかった。

こうしてヤーシンは午後1時ごろまで歌を歌ったり、途中鳥を捕獲したり、河で魚を捕ったりして遊びながらのんびり放牧していく。群れから目を離していても、もし群れに異常が生じると

群れのなかにジャラスという鈴をつけたヒツジがいて急にその鈴が激しく鳴ることによって異変を知ることができる。のんびり草を食んでいるときはタンタンタンと軽やかな柔らかな音色が聞こえる。夜、ドーナム内でヒツジも人も寝ているときでも、家屋の近くにキツネやオオカミが出没するとこのジャラスをつけたヒツジの逃げまどう振動でこの鈴が鳴り、牧童が異変を知る仕掛けである。

牧童の群れに対する扱いはかなり乱暴である。群れの移動方向を転換させたいときはジャラスをつけたヒツジやケビッシュという去勢していない雄ヒツジに向けて棒を投げつける。トゥースはナツメヤシの枝でできており、かなり遠くから特定の個体に命中させることができる。棒と同時に多種多様の口笛や掛け声を放つ。口笛と掛け声は連続して使い、単純な音を繰り返しながらリズムカルに強弱高低をつける。たとえば口笛をピーピーピーと吹き、掛け声をガルハガルハガル……ジョイジョイジョイ……、シェーシェーシェーアラララ……フーアララララ……フーと連続し最後にティキティキティキティキ……と発声すると特定のヒツジが近寄ってくる。昼すぎにフォージアとサーディヤがロバに乗ってヤーシンの群れめがけてでかけていく。午後は夕日の落ちるころまでフォージアとサーディヤが牧童をつとめる。姉妹は群れを放牧させながら泥人形をつくったり、花摘みをしたり、また石ころでお手玉のようなことをしながら移動する。

夕方アスワードが群れを迎えにいく。群れはアスワードの家屋の近くにくると鳴き声がいちだんとやかましくなる。そしてドーナムのなかからは子ヒツジの声も激しくなる。この日の日の入りは5時5分であった。ドーナム内に入ると待ちかまえていた女たちが搾乳を始める。数十頭のヒツジの搾乳が終わればドーナム内で隔離されていた子ヒツジの部屋の扉が開放され授乳がおこなわれる。この頃になると太陽もすっかり姿を消し、かすかに赤い西の空に村を囲むナツメヤシの樹影がシルエットをつくる。人々は仕事を終えて家屋に入りモーゲットのまわりであつちャイ（多量の砂糖をいれた紅茶）を飲む。放牧の1日は簡単に記せばこんなものだ。

2. ヒツジの名称体系

このような放牧に何回となくつきあって、彼らのヒツジ・ヤギの認知の方法を解説していった。はじめはアスワードの153頭のヒツジすべてを個体識別して、しかる後に彼らの名称法と比較すればもっとも合理的であると考えたが個体間の身体的特徴・行動の特徴がニホンザルなどに比べて区別しにくく、この方法では困難であった。後ほど彼らの方法を学び比較的容易に身体的特徴だけで識別できるようになった。そこでヤーシン、フォージア、サーディヤの放牧に同行し、任意の個体を指し、なんと呼ぶか質問をした。それが例えばシャガラ・サブハといわれればその個体を見失わないようにして名称と共に身体的特徴、角や体の配色パターン、雌雄についてできる限り詳しく記し、そのヒツジをスケッチした。こうして何枚かのヒツジの絵と記述を収集した後

(4)

に成分分析的な方法でシャガラとサブハの意味することを抽出していった。たとえばシャガラ・

サブハとシャガラ・ダルアの2頭の絵と記述を比較しサブハとダルアの身体的特徴の差異がなんであるのかを発見していくわけである。

当初から彼らがヒツジについて言及するときあるいは放牧の途中で呼びかけるとき、名称が二名法的あるいは三名法的な構造をもっていることはわかっていた。これはヒツジだけでなくヤギでも同じであった。彼らはこれら以外にウシ・ウマ・ニワトリ・アヒル・シチメンチョウを飼育しているが、個体に言及するとき二名法的な名称をもっているのはウマだけであり、それも個体数は極めて少ないのでここではヒツジ・ヤギだけに限定して論を進める。家畜の認識体系については現在かなりの研究があるが、ここではイラク共和国と地理的に近いトルコ系遊牧民ユルック⁽⁵⁾の優れた民族誌を著した松原正毅の研究を参照してみたい。

彼はユルックのヤギの識別体系について3つのレベルがあることをいっている。第1のレベルは成熟度と性差を識別表徴とした名称体系である。第2のレベルは記述的な名称体系にもとづく認識体系の存在である。第3のレベルは個体名と系譜制にもとづく認識体系である。そしてこの3つのうち第1のレベルは牧畜文化の深層に位置し、第3のレベルはもっとも表層に位置するものとした。その中間に第2のレベルの識別体系があるとしている。このヌーレ・アミン村のヤギ・ヒツジの識別には、松原のいう3つのレベルの認識体系のうち、はじめの2つは確実に存在する。第3のレベルについては筆者の調査では明確ではなかった。

性差と成熟度に応じたヒツジ・ヤギの名称は表に示したとおりである。ヒツジについてみると、まずヒツジ全体を表わす総称はガナムという。これは群れ全体を表わしていて、日常会話でヒツジ一般に言及するときはこの言葉が使われる。表に示すとおり成熟度は3段階に分類される。ヒツジは生後2週間までを雌雄を問わずハルーフという。この段階がすむとオスはタリ、メスはタリアと呼ばれる。この期間は約1年間続き子ヒツジは授乳を必要とするが乳をとるため人為的に母ヒツジと隔離される期間である。この期間を過ぎるとオスは選別を受けて種オスとして残されるか、去勢もしくは屠殺される。種オスとして残されたものをケビッシュというが、村人の話では一般的に50頭のメスに対して1頭の種オスの割合であるという。人為的に雌雄の比を極端にするのは牧畜を生業とする人々の一般的な家畜管理技術である。去勢されたオスもしばらくすると肉用に売却されるのが普通である。アスワードの153頭のヒツジ群のなかには5頭のケビッシュがいた。そして成獣となった雌ヒツジはナジャと呼んでいた。

付言しておけば種オス・ケビッシュは村では権威と性的能力の象徴であり、「ケビッシュのよ

うな男」という表現は猥雑と誇示の両義的な意味をもっている。番犬として飼っている犬は獐犢であるが人に対して「犬のような」という表現は最大の侮辱であり、決して使わない。ヤギに関しては名詞が異なるだ

表1 性差と成熟度によるヒツジの名称

	総称	生後2週間	生後1年間	成獣
雄ヒツジ	ガナム	ハルーフ	タリ	ケビッシュ (種オス)
雌ヒツジ	ガナム	ハルーフ	タリア	ナジャ

けで基本的にヒツジと名称体系は相同である。ヤギの群れはマーズ、1頭のメスヤギはアニズ、1頭の種オスはティエスという。ヒツジの身体的な性差について若干触れておくと、雌雄では体の大きさと角の有無・形状が異なる。多くのナジャは角がないのが普通であり、あっても概してそれは小さい。ケビッシュの角は威風堂々としていて頭上に巻いている。ヤギ・ヒツジの利用はユーラシア大陸の乾燥社会に同質的で、乳・羊毛・ヤギの毛が主として利用される。さらに去勢されたヤギ・ヒツジの肉も利用される。さらにヤギ・ヒツジの乾燥した糞は燃料としても重要である。

ドーナムのなかにはこのヒツジ・ヤギの糞を乾燥したものが貯蔵されている建物がある。ヌーレ・アミンでは主食としてホブスというコムギ粉を中心にした酵母で醗酵させないパンを食べる。パンを焼く炉は泥で簡単につくったドーム状のものであるが、水で練った粉をこのドームの壁面に手で勢いよく張りつけ焼く。燃料はヒツジ・ヤギの糞である。ときどきホブスが落ち中にヒツジ・ヤギの糞が混じることもある。

以上が第1のレベルの識別体系である。次に第2のレベルの識別体系をみてみよう。これが前述したように彼らが個体を指差して聞いたときに返答する名称体系であり、この構造については成分分析的な方法を用いて解明していった。さてヒツジ・ヤギのような群れをなしている動物を1頭1頭識別しているのか、それとも別の仕掛けがあるのか分類の論理をみいだしていったプロセスを若干述べてみたい。我々が日本の文化のなかで知っている分類の論理は多様な植物や動物に適用される検索表に代表されるものと人間の命名や同種内の個体識別として表現されるサルやウシの名前に代表されるものの2つであろう。前者は異種間のさまざまなレベルの差異に着目して最終的にリンネの二名法による記載をおこなう。差異は系統的な類縁性に基づき、二名法の論理構造は進化史的な系統樹の体系を構成している科学的分類体系である。もちろん差異と類似にもとづくが進化や系統とは別の実用的な分類体系をもつ民俗分類も存在する。いずれにせよ動物学や植物学の検索表の論理は異種間を類別する分類の論理の典型といえる。ここで問題になるのは後者の同種内を類別する分類の論理である。形態・生態ともによく似たもの同志の集まりであるイラクのヒツジ群という同種内の命名の論理が我々のよく知った日本の場合とまず異なっていることを述べ、両者の特徴を相互に炙りだす。これが本論の目的である。

同種の個体が群れとして存在してお互いによく似ているヤギ・ヒツジもよくみるとそれはかなり個体差がある。しかしヌーレ・アミン村の牧童たちはこの個体差に着目して人の名やペットの名前のように個体名はつけていない。ヒツジの群れ全体を眺めていると雌雄を問わず意外に色の豊富さとその組み合わせである紋様のパターンの多さに気づく。薄汚れた白、黒、焦げ茶色、薄い茶、あるいは白と黒の斑点模様などが多く、なかでも顔や耳など頭部に近いところにその変異は多い。また四肢の足首に体色と異なる変異が現われることもある。体部は単色である場合が多い。

牧童が特定の個体を指示するときの名称を集めて成分分析的に示差的特徴を抽出する作業をつづけた。作業は極めて繁雑であるのでいくつかの例を提出するのにとどめる。図2に示したようにアヴセ・サブハと呼ばれる個体とジャガラ・サブハと呼ばれる個体がある。両者とも体色は白

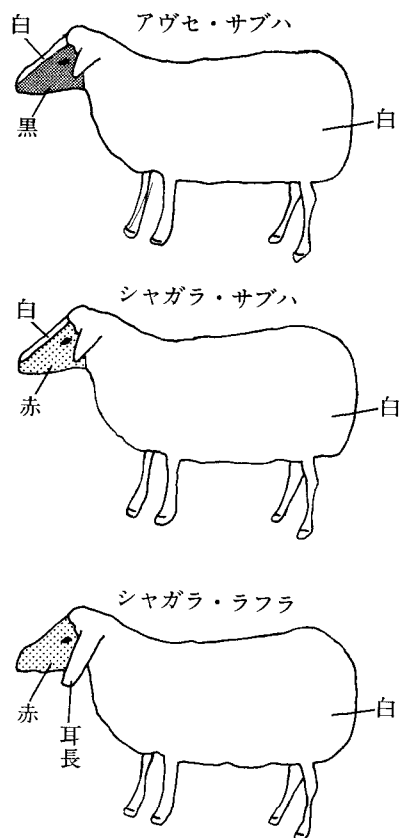


図2 示差的特徴の抽出

で、頭部に相違がある。アヴセ・サブハは頭部が黒で鼻筋に白いところがある。シャガラ・サブハは頭部が赤で鼻筋はやはり白い。両者に共通するサブハは体色の白か鼻筋の白かのいずれかを指示しているはずである。そこで今度はシャガラ・ラフラと称されるものと比較する。するとシャガラ・ラフラとシャガラ・サブハの両者に共通するのは頭部が赤で体部が白ということである。そうすれば前述のサブハは体色の白と鼻筋の白の共通性のうち鼻筋の白を指示している。したがって必然的にラフラは耳長を指示しているのではないかと演繹できる。実際こういう名称を集めてみて、牧童にラフラは耳のことかと聞けばそうだと答えるから、この作業を続ければ彼らが弁別指標に使う身体的特徴はつぎつぎ判明してくる。以上の結果抽出した名称体系に使われる示差的特徴をまとめたのが表2である。

まずアラビア語には一般に名詞に男性形と女性形があるけれどもヒツジの名称にもそれが存在する。そのことは数は少ないが雄ヒツジの名称が全く雌ヒツジの名称と異なるのですぐわかる。たとえば全体が黒や赤

表2 ヒツジの示差的特徴と名称体系

ヒツジ全体の模様 (A)				身体的特徴 (B)	
頭部	体部	女性形	男性形	身体部分	名称
A ₁	白	ガルファ	アガラ	B ₁ 首筋 頭頂 鼻筋	ダルア
A ₂	黒	スウォード	アスワード		カラ
A ₃	赤	ハムラ	アハマル		サブハ
A ₄ -a	斑 (赤と白)	バグア	アブガ	B ₂ 耳長 耳中 耳小	ラフラ
A ₄ -b	斑 (赤と黒)				ジャドラ
A ₄ -c	斑 (黒と白)				アクファ
A ₅	赤	白	シャガラ	B ₃ 角有 角無	ジャルネ
A ₆	黒	白	アヴセ		ジェンマ
A ₇	斑	白	ダマ		アダム

の単色であるヒツジは弁別指標として色が決め手になっていることは予想でき、逆にその言葉を用いて別の同じ色のヒツジを調査者が指示すれば牧童が同意を示す。それが雌雄によって呼び方が異なることから色に関する弁別指標の男性形・女性形を抽出できるわけである。ヒツジを指示する命名の基本は体色である。命名は単一の単語で呼ばれる場合、二名法的、三名法的、ときには四名法的に呼ばれる場合があるが最初にくる単語は体色を指示する言葉であり、これだけに男性形・女性形の区別がある。命名の最初にくる語彙は体色であるがこれには2種類ある。それは頭部から体部すべて単色である場合と首より上部の顔部・頭部と体部の色が異なる場合である。前者には白・黒・赤の単色であるヒツジに対する名称であり、それぞれ雌ヒツジではガルファ、スウォード、ハムラの3つである。ちなみにヤーシンの掛け声の始めにでてくるガルファガルファは単色の雌ヒツジに呼び掛けていたものである。ヤーシンの呼び声に応じて、このガルファはヤーシンの近くに寄ってきた。

ケビッシュである雄ヒツジに対してはアガラ、アスワード、アハマルというが、アスワード、アハマルはアラビア語でそれぞれ黒、赤を意味している。模様を考えなければヌーレ・アミン村のヒツジはこの3色が多く、これ以外には灰色があるが数は少ない。もちろん赤でも薄い茶色からエンジに近い色まで段階的である。しかし模様を含めて配色のパターンは遺伝的にかなり限定している印象を受けるが詳しいことはわからない。

体色が単色でない場合は基本的には4つのパターンがある。そのうちの3つは首より上部の色と体部の色が異なる。首より上部が黒、そして体部が白のナジャをアヴセと呼ぶ。首より上部が赤（かなり茶色のケースも含む）、体部が白のナジャをシャガラという。もう1つの場合は体部の色は白で同じであるが首より上が赤・黒・白の斑になるものである。この斑の場合の3色は配色はまちまちであり識別がむづかしいが、このパターンのナジャをダマという。4つのうちの最後のケースは首より上部と体部が区別なく斑になるものであり、これにはさらに3つのパターンを牧童は識別している。つまり赤と白、黒と赤、黒と白であるが、このケースにかぎり斑と地の色を組み合わせで呼ぶ。斑を表わす言葉を先に、その後に地の色をつける。配色によっては地の色と斑の区別が困難であるが、斑は量的に少ないほうであり、地に対して島状に模様がつく場合が多い。つまり斑+地の色の順番で呼称するが、地の色の白・赤・黒に対してバグア・ガルファ、バグア・スウォード、バグア・ハムラである。したがってバグア・ガルファとは地の色が白のナジャで斑が赤か黒のものである。同様にバグア・スウォードは地の色が黒に対して、斑が白か赤の模様である。バグア・ハムラは地の色が赤で、斑の部分の色が白か黒である。しかしすべてのケースが実際に存在するわけではない。

植物の検索表では最終的には種の記載は属名と種小名を併記する二名法になるが、牧童たちのヒツジの名称も多くの場合種小名に相当する言葉を体色の言葉の後につける。体色によるヒツジの分類でも7つのカテゴリーに分かれ、それぞれの分類群の数は小さくなる。しかし彼らはさらにこの中を細分類している。この細分類に使う示差的特徴は模様の特徴だけではなく耳の形も使

う。このわずかな身体的特徴には3種類ある。いずれもこの場合は雌雄に関係なくナジャでもケビッシュでも使う。

かりに体色をAで表現しておき、このわずかな身体的特徴をBで表わすと命名法はA+Bと表現できる。Bはヒツジの体の部分的な模様に着目したケースと耳の形そして角の有無という身体的特徴を示差的特徴として使う場合がある。Aの体色によるものを図に示すようにA₁, A₂, A₃, A₄, A₅, A₆, A₇としておく。Bの身体的特徴をそれぞれB₁, B₂, B₃としておく。命名法はA+B₁, A+B₂, A+B₃いずれも使うが、三名法のときはA+B₁+B₂あるいはA+B₁+B₃の形で使う。

四名法のときはA+B₁+B₂+B₃とするがこのようなケースはほとんどない。彼らの命名の論理からは必然的にそうなるけれども日常生活では四名法を使うことはまずない。調査者である筆者が確認の意味である個体について四名法で言及するとそうだと答えるが、これはおそらく論理だけが正しいことの表明にすぎないと思われる。前述した全身斑の模様の場合はそれを身体的特徴と考えればB₁に含んでもいいかもしれない。ただこの場合になぜB+Aと倒置するのか説明できない。

さてB₁にはサブハ、ダルア、カラの3つがある。サブハは元来白い岩塩を指す言葉であり、ヒツジに言及されるときは鼻筋だけが白いものをいう。とすると論理的にはA₁は全身が白いヒツジを指すのでA₁+サブハはありえないことになる。事実そのように呼ばれるヒツジは存在しない。またA₄のうちaとcもサブハとの区別がむづかしく、サブハを付けて呼ぶことはない。カラというわずかな身体的特徴はサブハとよく似ているが鼻筋ではなく頭部の部分が白いものであり、サブハと同様にA₁, A₄, A₇にはつかない。したがってサブハとカラはA₂, A₃, A₅, A₆の後につき二名法を構成する。

また身体的特徴としてダルアと称されるものがある。これは首より上部の色が首の回りから肩まで同じ色になっているもので、ちょうど体半分のところで色違いになっているようなヒツジである。したがってこれも論理的にはA₁, A₂, A₃, A₄にはつかず、A₅, A₆, A₇にのみつくことのできるものである。ただダルアがつく場合もバグアと同様にB+Aと倒置されるのが普通である。B₁はわずかな身体的特徴のうち模様の変異であったが、B₂は耳の形の変異である。

トルコ共和国のユルックを調査した松原正毅はヤギの識別で耳の形が使われることを報告しているが、⁽⁶⁾ヌーレ・アミン村の場合もよく似ている。耳の形には名称が3つあり、もっとも大きく垂れ下がったものをラフラという。そしてもっとも小さく頭部にわずかに横になってついている形態のものをアクファという。アクファとラフラの中間のものをジャドラといっている。この3つをB₂として使用するが、これだけで単独に用いることはない。A+B₂の形で通常使うがB₁との関係でいうと、B₁のほうがB₂より使用の優先順位がある。つまりダルア・カラ・サブハの身体的特徴がある場合はそれが優先する。A+B₁あるいはA+B₂のカテゴリーに分類されるヒツジの個体数はかなり少なくなり、それ以上は普通牧童にとって言及する必要がない。しかしある個体が行方不明とか子ヒツジに授乳させるとか特別のときは、さらにA+B₁+B₂という三名法

を使えば分類されるべき個体数は減少し、ほぼ目的の個体に到達する。

もう1つ着目される形質は角の有無である。雌ヒツジでもしばしば角をもっており、あるものをジャルネ、ないものをジェンマという。これを B_3 とすると三名法、四名法の組み合わせは数多く作ることができる。三名法・四名法を使うときはほぼ個体にまで到達することが多い。個体差はこの方法で論理的には A は7種類、 B_1 は3種類、 B_2 は3種類、 B_3 は2種類だから126種類弁別できることになる。ヌーレ・アミン村の9軒の家のヒツジの保有数は雌ヒツジで150頭から200頭前後である。したがって四名法まで用いればその名称に該当するヒツジは1頭からせいぜい2頭であり、個体識別はこの方法で十分成立することになる。ヒツジの名称体系を解明してみようという動機になった、ヒツジの全個体数がいい加減であっても迷いヒツジを特定できるのはこの名称体系と関連している。つまり $A+B_1$ あるいは $A+B_2$ の二名法分類でもそのカテゴリー数は42通りになる。だからそれぞれのカテゴリーに属する個体数は4～5頭であり、実は牧童はこのカテゴリーに属する頭数を把握している。だから迷いヒツジが出た場合即座にどのヒツジが行方不明になったのか認識できるわけである。このような巧妙な仕掛けがヒツジの名称体系のなかに潜んでいたのである。全個体数を知らずともヒツジの全個体を識別しているという、ヌーレ・アミン村のヒツジの名称体系はハムリン山地の定住的農牧民にかなり普遍的なものであるらしい。

この名称体系の構造は基本的にはヤギについても同じである。体色の基本色があり、種小名にあたる B については耳の形以外に耳の色にも着目している。遺伝的な体色や身体的特徴の変異が顕在化する部位がヤギとヒツジで異なっているとみるべきであろう。これは実は規模は小さいがウマについても該当する。つまり家畜として主要なものには全てこの方法が適用されている。属名+種小名のような形式をとって同一種内の個体差を表現する、いうなれば民俗的二名法と表現できる。この民俗的二名法について松原はユーラシア大陸の遊牧民にかなり広く分布する可能性を示唆している。これがもし松原の予測どおりユーラシアの遊牧民に普遍的な現象ならば、遊牧民の世界観や自然観を考える上で重要なことであろう。⁽⁷⁾

さてここで一転して群れをなす家畜や動物についての個体差の認識をどうしていたのか、水田農耕民であった日本文化のなかの問題に立ち返ってみよう。しかしこれは文化の系譜論や伝播論を意識してもちだすわけではない。それは分類に関する論理構造を相互に照射できるのではないかという観点にたつ。つまり比較することによりその論理の特質がより鮮明になると考えるのであって、そうすることによって従来あまり日本文化のなかでは気づかなかった側面が炙り出されるかもしれないことを想定している。

しかし残念ながら日本の民俗文化のなかでこの問題を扱った例は極めて少ない。それは日本列島の骨格をなす2つの大きな植生である常緑広葉樹林と落葉広葉樹林の動物相に元来大型の群れをなす有蹄類が少ないことも1つの原因であろう。広大な草原をもたない日本列島では家畜文化は貧弱であった。したがって群れをなす同一種の動物の個体差を識別する必要はほとんどない。

したがって民俗文化のなかの牛飼いや馬飼いがわずかな頭数の動物に愛称や名前を与えたとしても、他者や共同体内で共有できる分類の論理にはなりにくい。1軒の家での比較的飼養数の多かったニワトリがどのように個体識別されていたのか寡聞にして知らないが、いずれにしても個体差そのものを分類し命名（もちろん分類はしている）することはなかったのではないだろうか。

動物に与えられた名称が個人や家を越えて多くの人に共有されている場合の民俗文化の命名として、2つの事例をとりあげてみたい。1つは野生ニホンザルの研究で研究者が個体識別のため与えた命名である。霊長類研究における個体識別法は群れをなす動物の個体差を識別する民俗分類の論理とみなせる。いま1つは闘牛の盛んな徳之島における牛の命名法である。いずれも命名法に関する優れた研究がある。前者は森明雄の「君は誰だい・君こそ誰だい—ニホンザルの個体識別と命名⁽⁸⁾」（西田利貞・伊沢紘生・加納隆至編『サル文化誌』）であり、後者は曾我亨の「徳之島における闘牛の飼育と、その分類・名称・売買の分析—人々はいかに闘牛を楽しんでいるか⁽⁹⁾」（『日本民俗学』188号）という論文である。以下次章のニホンザルとウシに関する記述はほとんど森・曾我の研究によっている。

3. 個体識別とヒツジ・サル・ウシ

ニホンザルに関する1つの挿話を述べてみたい。筆者は1983年6月から1984年4月までアメリカの州立テキサス大学・人類学部に Visiting Scholar として州都オースティンに滞在していた。そのとき同じ人類学部の霊長類学のブランブレット教授にテキサス大学付属の Arashiyama West Institute への同行を誘われた。研究所はオースティンのはるか南に位置しており、広大な牧場のなかの一角にニホンザルが放し飼いになっている。よく知られているようにアメリカ合衆国には野生の霊長類は存在しない。そのためテキサス大学の霊長類研究者は当時増え過ぎて困っていた京都・嵐山のニホンザルの一群を貰い受け、テキサスの広い牧場のなかにフェンスで囲まれた敷地内にニホンザルを放し飼いにした。アメリカの霊長類研究者のニホンザルの野外観察がこれによって可能になったわけである。多くの研究者がここを拠点にしていると聞いた。

しかしこの餌づけされたニホンザルは個体数が20頭近くから100頭を越える集団になった。そのため餌代・敷地双方が大学の予算では不足してきていて解決策を考えていた。この解決策の1つとして試みたなかにこれから述べようとするものが起きたのである。ペットを大事にする人々の慈善団体に対してニホンザルの餌代が不足しているので協力を求めた。ただ協力するのではなく個体識別され名前を付けられたニホンザルの写真を添付し、それぞれのニホンザルを養子にしてみませんかと募集したのである。これに応じた adopter がたくさんいて、これらの人が団体で自分の養子であるニホンザルを見学に来る日に筆者は遭遇したというわけである。

ブランブレット教授はこの出会いを筆者には見せたくなかったようだが、当初はその理由がよくわからなかった。餌場にでてきていたニホンザルのところに若い女性の研究者がこれがあなた

の養子と指差しながら説明していた。アメリカのペット協会というのは金持ちが多いのでこんな戦略をとってみた教授は僕に恥ずかしそうに説明した。やはり見られたくはなかったのだ。筆者も夜になればコヨーテの遠吠えの聞こえるテキサスの荒野で健気に適応して生きるニホンザルに実は感動していたのだから、そんなに恥ずかしがらなくてもと思っていた。しばらく見学が続いていたが、ペット協会の人々は自分の養子に納得したのかしなかったのかわからないが、突如もっていたカバンなどからいろいろなものを取り出しニホンザルに与えだした。それが写真(No. 24参照)にみる光景であるがなんと彼らは野球のバットやヘルメットあるいは赤ん坊のガラガラなどを与えたのである。僕も一瞬目を疑ったがブランブレット教授はさらに恥ずかしそうにしていた。つまり見られなくなかったのはこの光景であったのである。彼は何回も経験していたのであろう。

欧米の人間は動物と人間を峻別するのではなかったのか。これが僕の脳裏に浮かんだ最初の考えであった。では目の前の現象は一体どういうことだろうか。アメリカ人はペットにパーソナリティを認めるのかあるいは養子なのでアイデンティフィケーションが生じたのかと。これについてはいまだにどう解釈したらいいのかわからない。けれどもニホンザルを見る観察者の姿にこそ文化の問題が潜んでいそうな直感はそのときにもった。最近霊長類学者の伊谷純一郎の著作でニホンザルを観察する人々を対象に人類学的調査をおこない始めた若い大学院生がいることを知った。⁽¹⁰⁾日本人がニホンザルをどうみているのかアメリカ人がそれをどうみているのか、方法的にはむづかしいと思うが実証的なレベルで解かれるべき問題であらう。

伊谷は「日本人と外国人の間にも、サルを見る態度や行動に大きな違いがあるという。サル学とは何のゆかりもない見物人は、自らの内のものをサルやサルの群れに投影して自由な擬人的類推を働かそうとする」と述べ、続いてサル学に責任をもつ研究者といえども「主観的な頑迷さ、わがままさという点にかけては、一般の見物人とそれほど違いがあるわけではないと思っている」といっている。そして伊谷は順位という現象のとらえ方にダーウィンの進化論つまりヨーロッパの思想の根幹をなす個体中心主義、生存競争、自然淘汰からみることに異議申し立てをしている。伊谷は「順位とは、劣位者の自制によって優位者と平和な共存を保つという不平等原則に基づく規矩である」⁽¹¹⁾といっている。

伊谷が「自らの内のものを」といったものを筆者は霊長類研究者がニホンザルをどう命名しているかという問題のなかにみようというわけである。それには群れをなす動物の命名に関する民俗的論理が表出しているはずである。挿話として提出した上記のアメリカ人のニホンザルへの視点とはなんであろうか。あるいはヌーレ・アミン村の人々のヒツジに関する記述的名称体系と民俗分類との関係はどうであろうか。これがおそらく日本と非日本における個人と社会の関係のありかたの相違の問題を炙り出す有効な手だてになることは間違いない。それでは伊谷が研究者でさえ主観的な頑迷さをもつといったニホンザルの命名の民俗には日本の民俗分類のある側面が存在するのであろうか。

さて森明雄はニホンザルの命名に関してまず次のようにいっている。命名の前提には個体が識別されなければならないが、「われわれがどうやってサルを個体識別しているのか、自分で今思い起こしても、最初に個体識別にとりくんだのは随分昔のことで記憶も薄くなっている⁽¹²⁾」として若い研究者にその経験を聞くことから始めている。

人によって多様な識別の方法があることがインタビューによりよくわかる。そこで特徴的なことは弁別する特徴がかならずしも形態的な特徴ばかりでなく、サルの性格や行動にまで及んでいることである。また「全体的な感じで識別する」とか「自分に（観察者である研究者）に対する反応」によって見分けるなどの例もあることである。「横顔さえあれば区別できる」という研究者もいる。そして「外国のサルの研究では、ニホンザルとは異なった識別特徴が選ばれている。例えばJ氏はある個体を尻尾で識別したし、K氏は別の種を尻で区別した。G・ジャラーはゴリラを鼻の皺文様で区別した⁽¹³⁾」と外国人研究者で挙げた例がいずれも身体の形態的特徴であること

表3 各群れで得られた名前数

群れ名	名前数
屋久島	50
音海	26
下北	34
臥牛山	67
幸島	36
高崎山	876
志賀	114
勝山	51
小豆島I	75
小豆島K	79
小豆島O	36
小豆島S	45
小豆島T	38
帝釈峽	34
都井岬	44
白山	72
箱根	196
比叡山	16
箕面A	151
箕面B	30
嵐山	66

森論文（註8）より転載

表4 各カテゴリーの名前の頻度

カテゴリー	ケース	割合
不明	318	.148
擬音語	34	.015
体の特徴	347	.162
似ている	48	.022
行動	55	.025
性格	46	.021
社会関係	158	.073
社会的地位	42	.019
番号名	74	.034
外国人名	127	.059
日本人名	210	.098
ご当地名	16	.007
サル	9	.004
植物	179	.083
動物	107	.050
動物の愛称	10	.004
地名	27	.012
雑	329	.154
合計	2,136	

森論文（註8）より転載

を付け加えている。森による日本各地で餌づけされた各群れで得られた名前数と各カテゴリーの名前の頻度を示しておく。

彼はこれらの分析を通じてニホンザルは「たんに個体が区別され、名前という符丁を与えられているだけでなく、名前によって群れの個体たちがカテゴリーに分類され識別されていることである」と結論づけている⁽¹⁴⁾。個体識別の多様なありかたを表にみるように身体的特徴、行動・性格、社会関係・社会的地位・番号名、人名などに分類している。そしてそれぞれの特徴を述べている。差別的名称が存在することやサルに爺さんを表わす名前が存在しないことなどの興味深い例について議論している。サルのメスには日本文化の人の名称と同様に太郎・次郎に相当する番号名がないことも抽出している。また植物名が多くメスに付け

られることも指摘している。

そしてこれらの分類の背後には動物にもパーソナリティーを認める立場があり、それが個体識別という方法の特色であるといっているわけである。それは日本の民俗社会の人間に対する命名が投影していることの別の表現であり、これは民俗社会の動物観といえないだろうか。先のヌーレ・アミン村の形態的特徴の弁別指標に基づく植物の検索表のような二名法と比較してみるとその特質はよくわかる。ヌーレ・アミン村では同じ種内の個体差を名称によって個体にまで行き着くのに形態差という指標だけをとりあげ分類していく。それには全ての個体を網羅する一元的な原理が存在するが、分類されたものは性格や行動は抜け落ちてしまっている。個体は他の個体と代替不可能な個体ではない。

それに対してニホンザルの分類では一元的な原理で分類するのではなく、多元的な分類基準が初めから存在している。つまりニホンザルは当初から分類されてあるものに名前が後から付与される存在なのではないか。ニホンザルの個体識別法が動物を擬人的な存在とみなす背景にはやはり動物にパーソナリティーを認めるかどうか岐路になっている。では闘牛をめぐるウシに関してはどうか。

まず曾我の闘牛に関する論文をとりあげる前に少し述べておきたいことがある。おそらく従来の民俗学ではこの論文は民俗学の論文としては認めたくない人が多いだろうと思われる。それは端的にいえばこの論文が、現に徳之島に生き闘牛を楽しむ人々がなぜ闘牛を楽しむことができるのかという視点にたって、まさに現在に生きる人々を分析しているからである。

この論文で歴史民俗学の立場からいえばそれにふさわしい内容はわずか2箇所である。それは闘牛のトレーニングで「大会の1～2週間ほど前になるとトレーニングをやめ、ウシを暗くした牛舎に入れる。餌も減らし青草を与えて体調を整える。また大安の満潮時をみはからって角研ぎを始める」という文章である。いま1つは「試合前日になると夕方か当日の朝になると、ウシをトラックに積んであらかじめ闘牛場の近くに借りておいた宿の小屋に移す。(中略) 小屋には邪霊を祓うために<トベラギ>(Pittosporum tobira) が吊るされている。<トベラギ>の臭気によって邪霊がウシに近寄れないのだという⁽¹⁵⁾」という文章である。

満潮時に向けてコトをなすというのは今でも現行の民俗として南西諸島や琉球列島で広くみられる現象である。また和名トベラの臭気で邪霊を追い払うことは節分のとき家の門に干魚とトベラをさす習俗で有名であるが、全国的にかなり広い分布をするものである。しかしこの習俗の断片のような現象は曾我の分析のなかではほとんど意味をなさない。

そしてこの分析の対象になっている人々が民俗学でいう常民であるかどうか吟味する必要があるであろうか。闘牛に熱中する徳之島の人々は階層としてもさまざまな人を含むであろうし、色川大吉のいう文字をもつ現代常民であろうとさほど問題になるとは思われない。⁽¹⁶⁾民俗学が史料の海や報告書に溺死することなく、現在の普通の人々の抱える民俗やその背後の心意がなんであるのかさぐるこそが民俗学だという立場があってもいい。曾我の論文が人類学であるのか民俗

学であるのか詮索することはあまりに硬直した思考であろう。問題はその調査から何を引き出し議論しているかである。筆者にはそれが十分日本の民俗文化のなかの命名とその背後にある民俗論理の問題であると考えられる。

曾我は闘牛大会に出場した 536 例のウシの個体名を中心に分析をおこなっている。この個体名はウシを飼育する家族やその親戚だけに通じるものではなくて、徳之島という島社会に共有された名前である。家畜に類別的な属性（色・模様・形態の特徴など）を指示する語彙を組み合わせで類別的名称を付与することは筆者の前述したヌーレ・アミン村や松原の調査したユルクでもみられる現象である。さらにこの属性を用いて個体名を付ける例は東アフリカの牧畜民トゥルカナ⁽¹⁷⁾に存在する。しかし曾我は徳之島ではこの属性にもとづいてウシの個体名が付与されることはないという。ではこの属性はみいだされないのかというところではなく逆にむしろさまざまな属性をウシの評価の基準に使っている。それは性・成長段階、品種、体色、角の形態をいくつかに分類するものである。こうした家畜の分類に特定の個体を指示する機能はあるが、分類して命名する論理には使われない。

この評価基準以外にも細かい基準をもっていて、それはウシの力量について日常の会話のなかでみられるという。しかしそれは性・成長段階、品種、体色、角の場合が多くの人に共有された知識であるのに対して、個人的性格の強いものである。松原は識別体系として 3 つのレベルの存在を主張し、第 1 のレベルから第 3 のレベルにしたがって文化の深層から表層へという想定をしている。それによれば徳之島では深層（性・成長段階による識別）から中間の層（形態などによる類別的名称体系）は存在しているが、それが命名の論理にまで顕在化しない。そして徳之島では表層における個体名だけが表出していることになる。どうしてこのようになるのだろうか、その差異を検証することで、徳之島の民俗論理の特徴を述べてみたい。

曾我は例えば「雷電トガイ号」「流星美龍号」「目手久グラマン号」などにつけられた個体名を雷電・トガイ・流星・美龍・目手久・グラマンと要素に分解して、それを分類して分析している。その分析とそれらの個体名が売買に伴いどう変更し継承されるのかをも分析してつぎのような結論を得ている。ウシの個体名は持ち主に固有であり、闘牛と持ち主にはある種の一体化が生じている。そして分類的な弁別を重ねてある個体を指示するとき、固有名によってある個体を指示するときは異なっているとしている。もちろんヌーレ・アミン村の牧童が前者にあたり、徳之島の闘牛を楽しむ人々が後者である。

曾我は結論として「分類的な弁別を重ねることである個体を指示するときは、個体の属する類一般から、特殊性によって個体を指示している」と述べ、この個体はある条件を満たす個体の集合の要素にすぎないことをいっている。つまり条件さえ満たせばその個体と別の個体は交換可能な存在である。これはまさにヌーレ・アミン村の牧童の使う類別的名称体系がそれにあたるだろう。徳之島のウシは「一方固有名によって個体を指示するときは、一般に対する特殊性によって指示するのではなく、単に非対称であることによって指示している。この方法で指示されるとき

表5 ウシの個体名の事例(要素に分割したもの)

要素数1 (147例, 27.4%)
g, t, y, j, m, k, m, t, j, m, m, h, H, S, Y, I, T, K, K, Y, M, M, T, F, Y, W, T, Y, I, M, F, F, H, H, I, I, I, I, M, I, I, U, I, I, F, N, F, K, A, E, N, S, K, K, K, K, K, K, K, M, M, M, M, U, M, Y, S, S, M, M, M, M, S, M, M, T, M, N, N, N, N, N, N, O, S, S, S, S, H, S, O, S, Y, M, H, T, S, S, T, T, T, T, U, T, U, K, F, 大五郎, 仮面ノリダー, 鬼太郎, 弁天小僧, 牛若丸, 若獅子, 荒武者, ハンター, 小鉄, 金太郎, ともちゃん, たつき, 戦艦大和, 神龍, 神雷, 雷電, 新鋭, 89リクルート, 天安門, 風林火山, 強力, 一八, 一力, 大力, 大力不動産, 南州土木, 中央開発, 関西エステート, 喫茶チャイム, 喫茶マイケル, 喫茶本気, 喫茶サンタモニカ, 喫茶チャンピオン, ゴールド, アイウエオ, はまゆう, やぐら寿司, 玄海寿司, 昭和35年生, 神戸
要素数2 (311例, 58.0%)
Kt, Tk, Mt, Ms, Km, Sf, Sk, Kj, Ms, Mt, Nh, Nt, Mh, Jy, Mh, Mt, Ks, Ky, Ky, Ft, Mt, Jn, In, Ss, Nt, Nk, My, My, Yt, Sf, Sh, Mt, So, Ok, Ak, Fm, Sm, Yr, Kt, Fd, Mm, Fm, Tt, Yd, Mt, Th, Ht, Un, Kk, Mt, Sk, Mt, Mk, Nt, Ms, Kn, Iy, Iy, St, Mm, Ih, Im, It, Mt, Kd, Tt, Ym, Sm, Ky, Ut, Im, Ts, Fk, Sy, Ut, St, Iy, Id, Iy, Om, It, Iy, Ky, Yk, Os, Ik, Mo, Nt, Ny, Ns, Sb, Mf, Yg, Ny, Ny, Ny, Tk, Iy, Kk, Ma, Mh, Ms, Mt, Me, Fk, Mk, Fh, St, Ah, Nt, Os, Ma, Ts, Ak, Om, Ky, Td, Ns, Ts, Ih, M2, T2, T2, K1, Y2, d花形, e花形, k花形, k花形, s花形, m花形, a花形, k花形, K花形, m花形, j花形, I花形, m花形, S花形, F花形, M花形, t花形, m花形, N花形, s花形, k花形, 東部花形, 湾屋花形, 桜花形, 一斗花形, 葵花形, キラメキ花形, 真一文字花形, 無法松花形, マルカ花形, アサト花形, 同土花形, 南部花形, 徳州園花形, 銀竜花形, 将光花形, ひろちゃん兄弟, T兄弟, t兄弟, T兄弟, F兄弟, M兄弟, A兄弟, S兄弟, K兄弟, G兄弟, M兄弟, S兄弟, M兄弟, Sブラザーズ, N兄弟, T兄弟, K兄弟, T兄弟, H兄弟, F兄弟, F兄弟, N兄弟, A兄弟, I兄弟, O兄弟, 関東兄弟, クロチュウS, シューズショップF, M開発, M板金, I建設, M石油, N土木, N電気, S大力, Sサッシ, Iサッシ店, 喫茶MrTN, 純喫茶ミチH, スナックY, F組, K塗装店, T建設, K鉄筋工建設, K鉄工所, N電気工事店, M自動車, Hタイヤ, Iサッシ, I興建, A実業, I運送, M農販, A土工, マイカーセンターF, インテリアH, インテリアN, ミスターTN, F建設, F板金, F工務店, Nオート, M産業, T組重機, K建設, 太陽館1, 関西エステート1, 喫茶ゴールド1, ビューティーサロン徳之島, ヤマサ建設, 大阪奄美ハブセンター, 大福環境開発2, 天城運送従業員, 暇商会従業員, Tカブラ, Kトガイ, Uトガイ, kトガイ, Gトガイ, Tアコー, Gアコー, Sアコー, Tサイヨ, tサイヨ, Y八丈, Mコバス, 勘八トガイ, 丸五トガイ, マルエートガイ, マイケルトガイ, 沖縄トガイ, 徳之島トガイ, 伊仙トガイ, 松原トガイ, 雷電トガイ, 秦斗トガイ, 中城ヒーク, 面縄カキヤ, 東恩納ワイ, 亀津ワイド, 琉球アコー, 岡前アコー, 亀津アコー, アサトアコー, 白龍王, コバス大力, 五人同志, 成人同志, 来夢同志, 亀徳青年団, 中伊仙青年団, 伊仙昭和28年生, 昭和41年H, 28年生伊勢寿司, 昭和62年生Y, 45年生I, 昭和30年生たつき, 流星美龍, 流星嵐, 五月嵐, 一発嵐, 登野城台風, 一心無敵, 大当同心, 闘魂M, 闘将Y, m大力, t大力, S虎, 瀬瀧小虎, U鉄兵, I小鉄, 常勝h, 猛将G, 常勝無敗, 激戦無双, ハッピードラゴンh, 竜王丸, 赤とんぼ, Mコブラ, Mハヤブサ, 豹永, 農産化学あゆみ, 関東T, I松天童, Kゴンボー, 友人2, 横須賀グラマン, 目手久グラマン, 沖永良部1
要素数3 (71例, 13.2%)

Mk 1, Yt 2, Mk 2, Ky 2, Mi 2, Nt 1, Nt 2, If 1, If 2, Hk 1, 新Sk, F 清掃舎 1, M鉄筋 1, M鉄筋 2, T建設 1, F組小虎, T建設従業員, K建設従業員, F組従業員, K産業従業員, M鉄筋従業員, 昭和38年龍騎, 39年生竜王丸, 36年海道天神, 中伊仙青年団同志, 激戦花形T, 常勝花形M, 新参花形D, m花形S, 極真花形M, 新力花形K, s花形T, m花形T, スクリュー花形N, 国際花形U, 平成花形鬼太郎, 一文字花形S, 速戦花形S, Hy 兄弟, T開発兄弟, N兄弟オパール, K兄弟雷輝, 南闘嵐, 三強嵐, 一発嵐Y, 戦闘嵐t, 闘魂嵐F, 激戦嵐T, 昇龍嵐T, 昇龍Tk, 拳龍花形h, 極竜花形S, 昭和47年生鬼龍花形, 闘魂M花形, 誠心ムサンI, Y一力K, Mt ボクシング, 大阪奄美ハブセンター 1, K建設パンダ, O建設カン太郎, a トガイ I, 川津辺トガイK, 黒勝南, 首白 2, 背白花形, 首白花形, 内白タビ, K角白, 平成美龍k, 花徳青年m, 保徳花形

要素数 4 (6 例, 1.1%)

下久志青年団富士嵐, 昭和43年成人同志N, 銀琉龍巻S, 白龍嵐S, 新諸田青年同志, S興業友人 2

不明 宝栄穀隆S

曾我論文(註9)より転載: 名前は意味を理解できる一番大きな単位ごと(要素)に分解されている。人名の姓と名は、姓を大文字のイニシャルで名を小文字のイニシャルで表わしている。実際の名前は要素を組み合わせて使用する。

の個体は<代替不可能>な個体であり、数えたり、足し算をおこなうことはできない⁽¹⁸⁾」という分類の論理に支えられたものであるという。つまり「特殊性」によって指示される個体性と区別して「単独性」の個体であるといい、特殊性と単独性の2つ論理基準を抽出している。

曾我は徳之島の闘牛の調査から個体性に2種類あることを実証的に検証したことになるが、それは特殊性による個体性と単独性による個体性と言い換えてもいいだろう。この単独性による個体性は森がニホンザルの研究者による個体識別法の背後にある動物にパーソナリティーを認める論理と同じものであろう。この単独性による動物の個体性の認識こそが多元的な原理による個体識別法を生み、性格や行動まで含む分類をおこなわしめている。動物にパーソナリティーを認めるという心意は命名の原理をヒツジとは異なる方向へ選択させていくのではないか。ヌーレ・アミン村の牧童の一元的で形態的な分類はどこまでいっても動物のパーソナリティーにまでいきつかない。比喩的にこの両者の差異を述べるならば、ヌーレ・アミン村のヒツジは分類されていくものと表現し、ニホンザルは既に分類されてあるものと表現しても許されるであろう。

おわりに

動物の同一種内の個体差をどう弁別して分類し命名するかイラクの定住農牧民の牧童と日本の霊長類研究者および徳之島の闘牛を楽しむ人々の3つのケースを中心にみてきた。対象となっている動物がヒツジ・ウシ・ニホンザルの3種であるが、動物と人の関係が家畜・研究対象・闘牛とそれぞれ異なり、これを同じ水準で比較することへの疑問も当然あるであろう。またそれぞれの動物が群れとしての家畜、野生の餌づけされた群れ、自分の家の2〜3頭の家畜というより自らの分身のようなウシであり、群れであるかないかの差異も単純な比較を許さないだろう。しか

しそうであっても動物への態度という点で、相互のありかたの相違を際立たせることはあるのではないだろうか。

日本の霊長類学の独創的研究はニホンザルの個体識別から出発した。しかしこの方法は当初から意識的にニホンザルの社会の分析手段として必要であった。そのこと自体は日本の霊長類学をリードした今西錦司や伊谷純一郎の動物社会学の理論の一部であった。しかし命名をどのようにするかという具体的な問題は日本の民俗文化の担い手としての動物観を反映している。事実この命名方法は多くの試行錯誤を繰り返しながらも多くのニホンザルの研究者に受容されていった。そしてそれをあたかも証明するように徳之島で闘牛を楽しむ人々のウシに対する命名がある。この類似性は曽我のいう単独性による個体性の認識ということになるだろう。逆にヌーレ・アミン村の牧童の植物検索表の論理に類似した民俗的な二名法といかに個体性の捉えかたが異なるか明らかであろう。それは形態などを指標にした機械的な特殊性による個体性の把握といえる。日本の民俗文化におけるこうした単独性による個体性の認識は同一種内の個体差ばかりでなく種間差の認識、さらに動物だけでなく植物にも及んでいるかもしれない。身の回りの動物・植物の、分類されていくものと既に分類されてあるものとの差異は日本の民俗文化の事物の民俗分類を考察する上で1つの視点を提供しようとする。分類するという行為の背後にある事物の認識の研究は今後さらに必要であろう。それにしてもテキサスの荒野に生きる健気なニホンザルに野球のバットを与えるアメリカ人とはなんであろうか。

謝辞

イラク共和国の発掘に参加してから既に15年の歳月が流れた。古いフィールドノートを見直したけれども書いてあること自体がもう忘却の彼方ということもたくさんあった。したがってフィールドノートのなかの誤認もかなりあるかもしれない。

発掘に参加するにあたっては国土館大学イラク古代文化研究所の藤井秀夫教授をはじめとして井博幸氏・松本健氏には大変お世話になったことをここで改めてお礼申しあげます。また現在国土館大学の教養部教授川又正智氏にはイラクの文化について発掘に参加してから今日までいろいろお教え願った。記して感謝する次第である。15年前の12月31日に日本を出発して1月1日にバグダッドに降りたち、迎えにきてくれていた現在京都大学教授石田秀実氏とすぐユーフラテス川の上流に向けてシリア方面に車で行った。その後石田さんにはいろいろ面倒をかけたけれどもなつかしい思い出である。

ただ1つだけ悲しいことがあった。調査隊が宿舎にしていた家で料理番として働いていたバヒーゼ村出身のサバーという青年がいた。彼とはよく食べ物の買い出しにジャラウラに一緒に行った。発掘にでかける前に料理をしながら僕は彼からアラビア語を教えてもらっていた。その返礼にジャラウラの帰りには彼が車の運転を習いたかったことを知っていたので、砂漠で彼に隊員には内緒で車の運転を教えた。故郷バヒーゼ村に車を運転して帰った時の彼のうれしそうな顔が忘れられない。その彼が僕が帰国してからすぐ始まったイラン・イラク戦争で徴兵を受け、国境地帯で戦死したことを隊員から聞いた。僕にアラブの文化の一端について教えてくれた弟のように可愛がっていたサバーが戦争という無益なことで殺されてしまったことは残念でしかたない。

註

- (1) 筆者の担当したテル・ハメディヤートについては共同担当者であった国土館大学・川又正智氏『ラーフィダーン』Ⅱ(1981), Ⅺ(1990), Ⅻ(1991), 国土館大学イラク古代文化研究所, に発表している。
- (2) 家畜の個体名や管理技術に関する研究には多くの蓄積がある。ここでは資料そのものの制約がある

ため比較することなどはあえてしなかった。ヌーレ・アミン村での観察を中心に記述したのは、日本文化における動物・植物の民俗的な命名の特徴をまず考えてみるためであった。上記の牧畜文化研究の代表的なものにはたとえば太田至「家畜の個体名はいかに付与されるか—北ケニアのトゥルカナ族の事例より—」(和田正平編著『アフリカ—民族学的研究—』, 1987, 同朋舎出版), 福井勝義・谷泰編著『牧畜文化の原像—生態・社会・歴史—』(1987, 日本放送出版協会), 松井健『セミ・ドメスティケーション—農耕と遊牧の起源再考—』(1989, 海鳴社), 福井勝義『認識と文化—色と模様の民族誌—』(1991, 東京大学出版会) などがある。

- (3) ナツメヤシの重要性については松井健「バルーチュ族のヤシ文化」(田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』, 1991, 平凡社) にくわしい。
- (4) 成分分析法については E. サビア, B. L. ウォーフ編著・池上嘉彦訳『文化人類学と言語学』所収の論文を参考にした。
- (5) 松原正毅『遊牧の世界—トルコ系遊牧民ユルックの民族誌から—』下, 1983, 中央公論社
ユルックについての言及はすべて松原に負っている。特に第3章「冬営地にて一家畜の出産と認識体系」3節「家畜の認識体系」p. 42~60では, 筆者の問題意識と重なることが多い。
- (6) 松原正毅・前掲書, p. 43
- (7) 松原正毅・前掲書, p. 59
- (8) 森明雄「君は誰だい・君こそ誰だい」(西田利貞・伊沢紘生・加納隆至編『サル文化誌』, 1991, 平凡社)
- (9) 曾我亨「徳之島における闘牛の飼育と, その分類・名称・売買の分析—人々はいかに闘牛を楽しんでいるか—」『日本民俗学』188号, 1991
- (10) 伊谷純一郎『自然の慈悲』1990, 平凡社, p. 131
この中で伊谷が言及している研究は最近, 『列島の文化史』9号(1994年, 日本エディタースクール出版部) に公表された。竹内潔「ボスって何?—野猿公苑の見物客のエスノグラフィー—」がそれで, ここでは彼の問題意識との近似性を感じたが, 本論の材料としてはとり扱うことができなかった。
- (11) 伊谷純一郎・前掲書, p. 132
- (12) 森明雄・前掲論文, p. 283
- (13) 森明雄・前掲論文, p. 288
- (14) 森明雄・前掲論文, p. 289
- (15) 曾我亨・前掲論文, p. 7
- (16) 後藤総一郎『柳田学の思想的展開』, 1976, 伝統と現代社, p. 181
- (17) 太田至「家畜の個体名はいかに付与されるか—北ケニアの牧畜民トゥルカナ族の事例より—」(和田正平編著『アフリカ—民族学的研究—』), 1987, 同朋舎出版, p. 787~827
- (18) 曾我亨・前掲論文, p. 42~43
曾我は特殊性による個体と単独性による個体の区別を柄谷行人『探究Ⅱ』(1989, 講談社) を引用して議論している。柄谷のこの著作における「固有名をめぐって」の思索はきわめて示唆的である。

(国立歴史民俗博物館民俗研究部)

Naming System of Sheep:

The Agro-pastoral People Settling in the Jabal Hamrin Basin, the Republic of Iraq

SHINOHARA Tōru

Since the animals with which we human beings have to deal fall into groups, we can ask how we are to identify their individual differences, or to classify and name the animals. In this connection, I have gone to the essentials of the logic of classifying and naming, taking three instances; the shepherd of the agro-pastoral people settling in the Jabal Hamrin Basin in Iraq, the Japanese researchers studying on Primates and people enjoying bullfights in Tokunoshima Island. The animals in question are of three kinds: domestic sheep, wild Japanese monkeys and bulls used in bullfighting. The logical classification of sheep is on the same principle as that of binominal nomenclature used in scientific plant name list and is based on morphological differences. To classify or name a sheep is not to indicate an individual sheep. It indicates a group which satisfies certain criteria and indicates something that can be replaced by some other individual. On the other hand, the naming of Japanese monkeys or bulls is a classification, recognizing each individual character on the basis of the identification of individuals. It indicates an individual which can't be replaced by others.

In folk-taxonomy about animals, at least two sorts of ideas can be considered. One is similar to the Linnean system of binominal nomenclature and the other is similar to individual identification method. In the folk-taxonomic Linnean system of binominal nomenclature where sheep are identified by pattern of body colour and length of ear, the natural characteristics and behaviour of sheep are lost. However, the folk-taxonomic Linnean system of binominal nomenclature is not observed in folk society of Japan. It is also suggested that the individual identification method which recognizes the animal individuality is not just peculiar to research scholars, but also is found at the Japanese folk society level. The difference in identification regarding the difference of individual bodies of the same species, might reflect a different view of animals between that of the Japanese and those of people in other countries.



写真1 放牧の途中、ディヤラ川でヒツジとヤギの混群に水を飲ませます。ヒツジの群れは集合的であり、ヤギは分散的であることがよくわかる。



写真4 このヒツジは彼らの名称体系でいうとスウォード・ジャドラとなる。つまり全身黒の雌で耳が中型の大きさということを示す。あまりこの種類はいない。



写真2 水を飲ませた後はヒツジとヤギは休憩する。ヤギは活動的でありあまり寝そべったりしない。



写真5 このヒツジは彼らの名称体系でいうとアヴェセ・サブハとなる。つまり体部は白で頭部は黒の柄模様であることを示す。ただ鼻筋は白いのでサブハをつけて呼ぶ。この種類は比較的多い。



写真3 夕方、放牧を終えて村に帰ってきたヒツジとヤギの混群。アドベ(日干しレンガ)の屋敷の周囲はタモル(ナツメヤシ)が植えられている。



写真6 これは彼らの名称体系でいう典型的なシャガラ・ラフラである。頭部が赤で体部が白の雌ヒツジであり、耳長を示すラフラは省略していることも多い。この種類はかなり多い。



写真7 午前中は女の子のオンミーヤ(学校)、午後は男の子のオンミーヤがある。だから午後になると牧童は少年から少女に代わる。午後集落の近辺で放牧させている二人の姉妹。



写真10 4月になってハムリン山地の草が一斉に青くなる。銃をもって山に遊びに行く。途中、うまい草の葉を見つけ生食する。



写真8 午前中、ヒツジ・ヤギの混群を放牧する牧童ヤーシン。牛の糞に仕掛けて鳥などを捕って遊ぶ。群れの誘導は口笛とこの杖と石を使う。



写真11 ハムリン盆地の中の冬の湿地シマーネの姿。放牧地として重要である。



写真9 少年や少女のいない家では若者が牧童をする。やはり杖は必需品であり、群れが草を食んでいるときはこの格好をすることが多い。



写真12 春を待つハムリン山地。山をよくみるとテラスのように階段状になっているのがわかる。これは放牧でヒツジ・ヤギの歩く道になっているからである。この地が長い間過放牧をしてきたのではないかとおもわせる光景である。



写真13 3月になり半砂漠に灌漑から水を引いて畑をつくる。土地はいくらでもあるが、水を引ける範囲が畑になる。



写真16 屋敷の中はいくつもの建物からなるが、ここは男たちが普段寝る建物である。この家に訪れた男のお客を接待するのは若い男の仕事である。右側が客人、左側がこの家の男たち。この後チャイ（多量の砂糖のはいった紅茶）と料理が出された。



写真14 畑の準備に忙しい男たち。アドベでできた屋敷の裏も畑である。



写真17 屋敷の一角には必ず飲み水が確保されている。円錐形の土器は通気性の性質をもっている。土器の表面から蒸発する気化熱によって熱が奪われ水はかなり冷たい。



写真15 半月形の鎌で小麦を刈る男。



写真18 夕方ヒツジの搾乳を終えると皮袋に入れて揺すり、脂肪分と上澄みのヨーグルトに分離する。ホプスと呼ばれるパンと一緒に、ヨーグルトは水で薄めて毎日飲む。これが日常食である。



写真19 半砂漠とおもわれたところも春になると一斉に花が咲く。



写真22 調理する小屋にあるモーゲット。つまり摺り白で、これで小麦を粉に挽き、パンを焼く。



写真20 半砂漠の植物は刺植物が多い。ヒツジ・ヤギはこれを平気で食べる。冬、もともと草のないときはこれらの根を口で掘り起こして食べる。



写真23 ホブスと呼ばれるふくらまないパンと油で揚げた卵。これはかなりのご馳走である。訪れた家で接待された。



写真21 建物の中の穀物を貯蔵する容器。これも泥を使って作る。ネズミの食害を少なくするように工夫されている。



写真24 アメリカ・テキサス州のテキサス大学付属 Arashiyama West Instituteのニホンザル。ペット協会の人々が自分の養子にしたニホンザルにおみやげのヘルメットやブロックのおもちゃをもってきた。